シニアースカウティング①を考える

その展開の実施について

稲葉睦美

教育規定改正の影響

昭和51年2月，全国会議における教育規定の改訂によって，シニアースカウトの組織，進歩制は一部改正され，現代社会に必要なスカウトの社会性を身につけることを目標として，その進級考査課目の手直し，そして現代青少年に魅力ある方法をもってプログラムの展開をするようにしむけられた。

具体的にいうならば，個々のニードの尊重，メンバーシップ，リーダーシップの養成であり，プロジェクト法の修得である。

しかもその根底に流れるものは，あくまで〝ちかい〟と〝おきて〟の実践であり，したがってその技法と目的とは明確に区別すべきである。

しかし，その教育規定改正によるシニアースカウティングの展開方法は，ともすると，ボーイ隊における活動の延長でしかなかった日本のシニアースカウティングにとっては，特に注目すべき内容が含まれていて，そのため各県連，地区，そしてそれぞれのシニアースカウト原隊のリーダーに対し，その進級課目の内容，用語の理解，そして課目ごとの基準などについて，ある種の混乱と疑問点を投げかけたことは事実である。

たとえば，全国県コミッショナー会議において，シニアーアドベンチャーキャンプの内容，隼挑戦キャンプ，富士スカウト挑戦キャンプとは具体的にはどのように行うべきか，あるいは個人プロジェクトとはどのようなものであるのかなどについて，たびたびその問題提起やその基準についての質問が行われ，そのマニアルなどの発行が要望された。

シニアースカウティングの現状

しかも，現状は大部分の県連，地区におけるシニアースカウトの数そのものがわずかであり，ボーイ隊シニアー班の登録も多い。したがって，その専任リーダーは極めて少なく，かろうじて隊登録をしているところでも実際の活動動員数はせいぜい10～15名程度である。

そして，それらシニアースカウトの多くは，カブ隊，ボーイ隊の奉仕のみに追われ，団のリーダー不足を補うことがシニアースカウティングのすべてであるかのような印象さえ与えてきた。

したがって，その特色である委員会活動やプロジェクトチームによる活動を実施するところではなくなっている。加えて，高校生年齢であるシニアースカウトを囲む社会的環境，俗にいう情緒不安定な青春期の精神的な不安感，情報の多様化による周囲からの誘惑，受験の重圧感，将来への目標等に悩みは数多い。

そして，リーダーもまた適切な助言をするまでには至らず，それらの理由が重なって多くのシニアースカウトたちがその組織の中から離れていったものと思う。

これは，カブ，ボーイスカウトの数に比べ，シニアースカウトの数は極端に少なく，また進級について考えるならば，隼スカウト，富士スカウトの数に至っては，年間を通じて何人取得したかを指折って数えるほどの現状であったことが，その事実を裏づけている。

日本の将来を担う若人，スカウトがスカウトを導くというスカウト教育の指導理念の上から考えてみても，シニアースカウティングの低調は，あすへの希望を失うことにもなりかねない。このまま放置しておくことはできない。

問題解決への動き現われる

そのような問題を解決するために，日本連盟において，昭和42年ごろから，シニアー・ローバー特別委員会が発足し，現在は進歩委員会の中にいくつかの作業チームができて，さらに研究，討議がくり返されている。

そのような中にあって，48年秋，新たに「シニアー隊長ハンドブック」が発行され，全国各地で説明会が開かれると同時にその試行隊が募集された。

しかし，それより少し前の47年4月，神奈川連盟は日連50周年行事のひとつとして，それまで満足すべき状態でないシニアースカウティングに対する刺激を与える意味において，全県下からシニアースカウトを選抜し，県連のコミッショナースタッフが直接それを担当して県連主催のシニアースカウトのトレーニングコースを設置し，これにゴールデン・アックス・トレーニングコース（以下ＧＡＴと略す）と名づけて2個隊を編成，約半年にわたり，その間延べ30日にわたる（主として，春，夏休みと毎月1泊2日で実施）活動を実施していた。

48年度は，さらに3個隊に増やし，シニアースカウト担当の県連副コミッショナーをそのトレーニング責任者としておき，夏には約10日間にわたる東北遠征を実施，その間，2泊3日の移動キャンプ，ＢＳ東北大会参加，そして史蹟研究，どうくつ探検等の個人プロジェクトを実施していたのである。シニアースカウトたちの行動はそのリーダーたちの予想をはるかに上回る成果を現わした。

その実行力，たくましさ，そしてりりしさを感じさせるシニアースカウトたちの動きは，原隊に帰ってからもカブ，ボーイたちの〝ヒーロー〟となり，緑のネッカチーフ，アックスのマークは後に続く者たちへの目標となった。当然，県連の隼スカウト，富士スカウトはこのコースの出身者がその大部分をしめ，海外派遣のための県連選考に対しても，常に上位をしめるようになった。そして49年夏，北海道の第6回日本ジャンボリーにおいて，その出身者22名は，県連派遣団32個隊のほとんどの隊の上級班長，隊付きを兼任していながらカラーチームを編成するなどして，その開会式，大集会の旗手として見事な活躍をみせた。

また，それより少し前の48年12月から49年1月にかけて行われたフィリ

写真は東京連盟「シニアーの森」から

ピンのアジア太平洋ジャンボリーに参加した日本派遣団第3隊（神奈川，東京，山梨）の主力もまた，そのＧＡＴ出身者であり，その時隊長であった私は，410 名を越える大派遣団（8個隊）の中にあって日本派遣団本部，救護部部長兼任であったから，第3隊隊長としての働きはせいぜい40％にも満たず，ほとんど自己のキャンプサイトにいる時間も少なかったが，第3隊のスピードや規律は少しも乱れることはなかった。かえって，体調をくずした他の隊のスカウトさえも第3隊のキャンプサイトへ収容し，特別食をつくって喜ばれたほどの余裕さえ示したほどである。私がまがりなりにも2つの任務を全うすることができたことは，ひとつにその主力をなしたシニアースカウトたちの自発的な働きによるものであったと常に思い浮かべている。

そのような成果を示しながらＧＡＴコースは50年度から，その展開を試行隊展開（「隊長ハンドブック」Ｐ47参照）に変え，同時に県連主催から各地区の進歩委員会，地区コミッショナーの手にゆだねられたのである。

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

地区単位組織への移行

地区単位組織に移行しても，最も熱心にそれを進めたのは湘北，横浜中央，そして川崎地区の一部である。（神奈川は9地区に分かれている。）すなわち湘北地区は50年1月，3泊4日でその改正された制度の研修会を日連那須野営場において行い，これはＧＡＴ予備コースと名づけて，湘北，横浜中央，川崎，横須賀の各地区からリーダー27名，スカウト38名が参加し，スカウト組織外からも特別講師をお招きし，「スカウティングと宗教」「世界の中の日本」「高校生の男女交際について」などの教養種目についてのセッションも加え，もちろんシニアースカウトの組織と運営，プログラムの立案と計画・プロジェクト法についても研修した。

そして3月の春休みに，その本コースは開始された。すなわち，ＧＡＴ第3期のシニアーアドベンチャーキャンプ（4泊5日，山中野営場）は1月の予備コース出身者の手によって運営され，8月の八丈島ベンチャーキャンプ（隼挑戦キャンプと2泊3日の移動キャンプを加えたもの）まで，それをつづけたのである。

同じようにして，51年夏は7つのプロジェクトチームに分かれ，個人プロジェクト，班プロジェクト，隊プロジェクトをもって第2次東北遠征，青森まで遠征している。その間，4，5，6，7月の4か月間に遠征までのプロセス（「隊長ハンドブック」Ｐ106～110）と海洋訓練をふくむ技能章訓練はすべて行われていた。

なお，横浜中央地区のＧＡＴは50年9月開始，51年4月終了をもって春休み，和歌山へ遠征している。

（この報告書は，シニアースカウト集合訓練の資料として，51年11月，全国県コミ会議において配布された。）

ＧＡＴ修了者は合計すると年間100名を数える。

リープナイト（飛躍の夜）とは

ＧＡＴのプログラムのうち，特に重視しているのは，そのシニアースカウトの組織で運営をマスターすると共に，シニアーアドベンチャーキャンプにおけるリープナイト（飛躍の夜）とよぶ夜話である。

このリープナイトとは，まずスカウティングの基本となる〝ちかい〟〝おきて〟の再確認から始まり，スカウティングの意義をシニアースカウト個人，個人がどう探し求めてゆくか。これからの人生にどう生かされてゆくかということを考えてもらうことがその目的である。それは行うことによって学べというスカウティングの指導理念と共に，今日の知性の高いシニアースカウトたちにとっては，自分で考えさせること，精究教理もまた大切なことであり，この運動におけるシニアースカウトとしての立場，その責任を自覚させるようはげまし，自らの向上意欲をもたせるようにしむけてゆくことが必要である。

すなわち，物事には右と左，上と下，陰と陽とがあるように，動に対する静，という両面にわたるスカウティングが必要であると思うからである。（本誌52年１月号の隼スカウトの小論文参照）

プログラムの展開そのものに関しては，こちらから与えることをせず，それぞれのスカウトが，自分たちのニードを出し合い，それを年間のプログラムにとり入れてゆくというやり方は，リーダーから見ると，どうも初めのうちはまだるこしく，両者とも大変当惑するものである。ブレーンストーミングからニードの整理，そして企画，立案，とその要領をおぼえると，スカウトたちはいきいきとして明るい隊カラーをつくり出し，従来とちがった意味において期待がもてる。それは，すばらしいプロジェクトレポート，一生懸命にとり組む態度，そしてその感想文からもよく推察できた。

スカウト運動発展のカギ

およそ高校生年齢の少年をもつ家庭において，その子供の教育に真の自信をもっている父母が何人いるであろうか。子供から大人に成長してゆくこの時期の青年たちは，自我意識が強くなる半面，最も周囲の環境に支配されやすい。そのときこそ，正しい方向づけをしてやれるリーダーが必要なのではなかろうか。シニアースカウティングこそ，将来の日本のスカウト運動を発展させてゆくカギであろうと思う。

そして，このスカウトたちは，21世紀の世界に羽ばたいてゆく若者たちなのである。

シニアースカウティング成功のカギは，個々のニードを尊重したプログラム，いいかえれば，そのプログラムも進歩制も個人のためにある。高校野球はあらゆる猛練習，血のにじむ努力によって甲子園をめざす。それでもがんばってやり抜くのは彼らのニーズがそうであり，やりがいを感じさせているからである。

シニアースカウティングにも，それがいえる。それが満たされるのなら，シニアースカウトたちもまた必ず，強く，たくましい力を発揮してくれるであろう。そして，それを導くのには愛情ゆたかで，熱意に満ちた多くのリーダーが必要なのである。

なお，次回からはシニアーアドベンチャーキャンプをはじめとして，その実際展開のプログラム内容，リーダースタッフの分担や動き，その細目について述べてゆきたいと思うし，できうれば，スカウトたちのナマの声も伝えたいと思う。

ＧＡＴは52年度も実施すべく，すでに７ＮＪを目標に始動している。

そして，それは集合訓練としてではなく，原隊でそれを実施できるように検討を加えているし，すでにいくつかの団は，30名のシニアー隊をもち班長，上級班長は隼，富士スカウトであって，単独でもやっていける隊もできていることを明記しておく。　（神奈川連盟副コミッショナー，医博）